

修士論文（要旨）
2018年1月

大学生の親しくなりたい同性の友人への自己表明に関連する心理的要因
—過剰適応と本来感に注目して—

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
216J4001
芥川 慎

Master's Thesis(Abstract)
January 2018

Psychological Factors Related To Self-expression toward Same-Sex Friends
with Whom University Students Wish to Become Intimate:
Focusing on Over-adaptation and Sense of Authenticity

Shin Akutagawa

216J4001

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第 1 章 問題と目的	1
第 2 章 方法	2
第 3 章 結果と考察	2

引用文献

第1章 問題と目的

近年、青年期の特徴として希薄な友人関係が挙げられている。しかし、青年期の友人関係は、「自分作りの機能」(榎本, 1995)を持つなど、青年期に親密な友人関係を形成することは、自己の発達のためにも重要な課題である。また、対人関係には性差があると考えられており、大学生を対象に、小学校高学年から大学生にいたるまでの同性の付き合い方について自由記述を求めた落合・佐藤(1996)の研究では、男子では力や支配が重要な意味を持ち、自立した付き合いが多いこと、女子では関係性の維持に気を遣い、情緒的な共有を求める交流が中心にあり、そのことから、女子は友人からどう思われるかという不安や懸念を強く感じているとしている。平木(1993)や柴橋(1998)は、他者との良好な関係を維持するための重要な行動として主張性を挙げている。柴橋(2001)は中学・高校生を対象にした研究から、言語的な主張行動である自己表明には友人関係の特徴がうかがわれるとしており、主張相手との親しさによって結果がことなる可能性を示唆している。また、新見・松尾・前田(2004)は、友人が同性か異性かによって大学生の主張性が異なるとしている。

石津(2006)は過剰適応を「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な要求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求にこたえる努力を行うこと」と定義している。このことから、過剰適応傾向の高い人ほど自己表明をあまり行わないと考える。

Deci & Ryan(1995)は、自尊感情を随伴性自尊感情と本当の自尊感情に分類している。そのうえで、本当の自尊感情を、自己価値の感覚を得るのに何の外的根拠も必要とせず、ただ自分らしくいるだけで感じられる自尊感情と定義している。この本当の自尊感情とは、他者の承認によらない自尊感情を指すと考えられ、本来感に近い概念であるとされる(伊藤・小玉, 2005)。益子(2011)は、対象者を高校生・大学生・壮年期・中年期に設定し、過剰適応と本来感の発達的变化を測定している。その結果、過剰な外的適応行動は年を経ても低下しないが、本来感は上昇することと、それによって年を重ねるに従って過剰な外的適応行動と内的適応の両立が可能となり、過剰適応は解消されていく可能性が示唆されている。また、石津(2008)は、過剰適応の外的適応と内的適応の順序性について、「内的側面が一次反応であり、その一次反応を踏まえた上で二次反応である適応方略としての外的側面が生起すると想定することができる」として、内的適応の低さが外的適応をとらせるという順序性を仮定した。そして、中学生を対象とした調査から、内的適応と外的適応の間に順序性を仮定しないモデルよりも、順序性を仮定したモデルの方が、適合度が高かったことを報告している。益子(2009)は青年期を対象にした研究から、過剰な外的適応行動が随伴性自尊感情を高める一方、本来感を低下させることを実証的に明らかにしている。そして、柴橋(2004)は、中学生と高校生を対象にした研究から、自分の気持ちや考えを大切にし、それを伝えることへの肯定的な価値観を持っている者は、率直な自己表明を行うことができることが示唆している。また、古市(1995)は、適切な自己主張ができない背景に、自己評価の低さや自信の欠如が関連するとしている。これらのことから、本来感を高めることができれば自己表明を行うことができるようになるかと考える。

よって、本研究では、大学生がこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人に対する自己表明を抑制または促進する心理的要因を、過剰適応と本来感という観点から検討することを目的とし、性差を考慮したうえで、大学生のこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人に対する自己表明と過剰適応および本来感の関連を検討した。

第2章 方法

東京都内の私立大学に在籍する18～24歳の大学生の男女を対象に質問紙調査を行った。調査は桜美林大学研究倫理審査委員会の承認を受けた後(承認番号：17001)、2017年6月1日～7月14日の間に実施した。本調査の質問紙の構成は以下の通りであった。

- (1)表紙：質問紙調査における留意点および質問紙の回答方法、倫理的配慮を記載した。
- (2)自己表明尺度(柴橋, 2001)：言語的な主張行動である自己表明を測定する尺度。全26項目。
- (3)過剰適応尺度(石津・安保, 2008)：過剰適応を測定する尺度。全33項目。青年期前期用として作成されたが、内容が本研究に合致しているため採用した。
- (4)本来性目録(Goldman & Kernis, 2006)：適応的な自尊感情とされる本来感を詳細に行動面から捉える本来性を測定する尺度。藤元・吉良(2014)が因子分析したものをを使用した。全29項目。
- (5)対象者に関する質問項目：対象者の年齢と性別の回答を求めた。

第3章 結果と考察

性差に関する t 検定を行った結果、男性は女性よりもこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明を行うこと、女性は男性よりもうれしい気持ちや自分の限界を認めて困ったことや辛い気持ちを伝えることが明らかとなった。また、女性は男性よりもこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人に気に入られようと思って行動することが多いこと、男性は女性よりも周囲に合わせるのではなく自分の感情や意思と合致した行動をとることが明らかとなった。

各下位因子ごとに2変数間でピアソンの積率相関分析を行った結果、これからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明である「意見の表明」と「不満・要求の表明」において、男性では「気づき」と正の相関、「自己抑制」とは負の相関を示した。女性では「気持ちに合った行動」と正の相関、「他者配慮」「自己抑制」とは負の相関を共通して示した。このことから、これからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明において、男性では外的な過剰適応との関連は見られず、普段から自分の価値観を理解し、それに基づいて行動することなど、自身の内的な要因が関連していたのに対し、女性では周囲に合わせるのではなく自分の感情や意思と合致した行動をとるなどの内的な要因が関連していると同時に、普段から相手のために自分を犠牲にして行動するなど、外的な過剰適応も関連していることが明らかとなり、その背景には青年期の対人関係における性差の特徴が示唆された。また、男女共に、これからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明と関連を示した過剰適応の因子は、全て負の相関を示した。そして、それらの過剰適応の因子と関連を示した本来感の因子もまた、全て負の相関を示した。さらに、これからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明に関連を示した本来感の因子は、全て正の相関を示した。このことから、過剰適応傾向が高いほどこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明を抑制し、本来感が高いほどこれからもっと親しくなりたいと思っている同性の友人と対峙する可能性のある自己表明を促進することが示唆された。

引用文献

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy : The basis for true self-esteem.

In M. Kernis(Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York : Plenum, 31-46.

榎本博明(著)・馬場謙一(編著)(1995). 友人関係の意義と破綻 現代のエスプリ第 330 号
学校臨床 至文堂, 55-64.

藤元慎太郎・吉良安之(2014). 青年期における過剰適応と自尊感情の研究 九州大学心理学
研究, 15, 19-28.

古市裕一(1995). 児童用主張性検査開発の試み ころの健康, 10(2), 87-93.

平木典子(1993). アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために— 金子書房

石津健一郎(2006). 過剰適応尺度作成の試み—信頼性と妥当性の検討— 日本カウンセリ
ング学会第 39 回大会発表論文集, 137.

石津健一郎・安保英勇(2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える
影響 教育心理学研究, 56, 23-31.

伊藤正哉・小玉正博(2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす
影響の検討 教育心理学研究, 53(1), 74-85.

Kernis, M.H., & Goldman, B. M. (2006). A multicomponent conceptualization of
authenticity: Research and theory. In M. P. Zanna(Ed.), *Advances in experimental
social psychology*. San Diego, CA : Academic Press.

益子洋人(2009). 青年期における過剰適応傾向に関する研究—外的適応行動と自己価値の
随伴性, 本来感との関連— 明治大学文学研究論集, 30, 243-251.

益子洋人(2011). 過剰適応傾向の発達の變化 明治大学文学研究論集, 34, 137-144.

新見直子・松尾沙織・前田謙一(2004). 大学生の友人関係における自己表明と他者の表明
を望む気持ち 広島大学心理学研究, 4, 139-149.

落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友だちとのつきあい方の発達の變化 教育心
理学研究, 44, 55-65.

柴橋祐子(1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研
究の課題について カウンセリング研究, 31, 19-26.

柴橋祐子(2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心
理学研究, 12(2), 123-134.

柴橋祐子(2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」
の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.